

世界の人びとのための JICA 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	カンボジアコッカエル村における貧困層の子どもたちへの伴奏型教育支援事業
(2) 実施団体名	Upple
(3) 実施期間	2017 年 5 月～2018 年 1 月
(4) 実施国	カンボジア
(5) 活動地域	カンダール州コッカエル村
(6) 活動概要 ①活動の背景： 2012 年より、カンボジアの首都プノンペンから南 45 km に位置するコッカエル村での教育支援活動、環境教育活動を実施。提携団体である NGO 団体 CIFT0 は、貧困層の子どもたちに日本語・英語・コンピュータを用いた教育を無料で提供。私たちは、CIFT0 を拠点に、日本語指導のサポートと共に、村では実施していない音楽・図工・体育の授業を子どもたちに実施してきた。また、夢の授業、絵本プロジェクト、環境教育活動（グリーンバード）を村の高校生と共に実施することで、キャリア教育、感性教育と共に、高校生自らが動き出す力を育む「21 世紀を創る教育」にも取り組んできた。2015 年度には、高校生 4 名を日本へ招待。約 1 か月の期間、日本の子どもたちとの交流やホームステイ、東日本大震災の被災地への訪問、企業見学、仕事体験などを実施。帰国後、日本へ訪問した高校生が、CIFT0 の授業の一部分を担ってきた。2017 年 3 月には、試行的に村のニーズ調査を実施。 村の中心を通る道路が国の事業によって拡張され、多くの人々が立ち退きを余儀なくされた。その結果として村の貧困は進み、CIFT0 を含め、多くの人々が多額の借金を背負うこととなった。一方で村の教育の実態は大きく改善されておらず、CIFT0 における事業の立て直しが必要不可欠となった。 ②活動の目標： CIFT0 を再建し、代表 SokPharith 氏と現地スタッフによる自立した塾の運営の基盤を作る。また、伴奏型支援をきっかけに、環境面を含めて村のニーズ調査を推進し、教育のみならず、村のニーズを満たすために CIFT0 が果たすべき役割を明確にしていく。そして、高校生が CIFT0 運営にかかわっていけるために高校生の「マイプロジェクト」を 1 人 1 つ起こしていく。	

2. 業務実施結果：

（１）実施した内容

【日本語教育の充実】

助成決定と共に、海外において日本語教育の経験のある現地スタッフを募集。5月24日からはタイで1年間日本語教育に携わってきた藤元氏を派遣。弊団体の元メンバーであり、4回のCIFT0訪問経験があるため、現地NGO代表のSokPharith氏との連携もスムーズ。弊団体が費用負担して開通させたWi-fiを活用して、タブレットやPCを用いた授業を実施。また、発展途上国での教育の経験を活かして、臨機応変な対応を行っていった。

また6月13日からはオーストラリアで1年間の日本語教育の経験のある堤氏を派遣。発展途上国での日本語教育とは異なる視点で、現地にある教科書などを活かしながら、定期的な日本語の授業を実施していった。

また、9月1日～7日までは代表の原水が現地に滞在。同行したメンバーが日本の文化（祭りなど）の体験を通じた会話、中高生との交流会の実施などを通して日本語でのやりとりを充実させた。

日本語の授業は現地日本人スタッフが調整はしつつも、CIFT0代表SokPharith氏が中心となって運営していけるように教科書や絵本、教材などの充実も図った。

【環境教育の実施】

2017年3月の滞在時に中学生の1人が「マイプロジェクト」として実施を決めたごみ拾いは、月2回、不定期ではあるがごみ拾いを実施。5月以降のスタッフ滞在後は2週間に1回のペースで実施が行われるように、ごみ袋の補充、ちらしの作成・配布、終了後に参加者に配る参加賞（飴）の準備など、環境面を整備。中心となって取り組んでいる中学生は村の大人も巻き込みながら、実施を続けた。

また、CIFT0がある道沿いの家や通路にごみ箱を弊団体が設置。定期的に回収を行うことで、村の人々のごみのポイ捨ての意識は少しずつ変わり、ごみ箱には常にごみが入っている状況だった。

9月の代表訪問の際に村のごみの状況を視察。ごみ拾いを実施していない地域については、ゴミが散乱している状況はあったが、CIFT0を中心とした周辺2kmのごみは確実に減少しており、成果が表れていた。

【ニーズ調査】

道路拡張が進むにつれて変化する村人のニーズを掴むために、代表SokPharith氏と、村出身の通訳者を雇い、村の人々とコミュニケーションをとると共に現状を把握する意味でいくつかの質問を行った。調査は、村人、こども、塾、先生などを対象とし、35人にインタビューを行った。質問内容としては、村のこどもたちの現状について、教育について、生活状況について、どんな大人に育って欲しいか、教育方針はどんなか、絵本についての印象などを聞いた。

調査の全体的な結果としては、以下のような声があった。（抜粋）

- ・生活が大変で学校に行かせたいけど行く余裕がない
- ・年齢を詐称してでも中学生で働かないと生計が苦しい
- ・こどもを工場で働かせたくないけど、それしか仕事がないから仕方ない
- ・日本語を勉強はさせたいが、まずはクメール語と英語が先
- ・CIFT0は村のために道路の補修やゴミ拾いをやってくれていて助かる

- ・絵本はこどもにとって大切で CIFT0 では読む機会があるのでうれしい
- ・日本人にはずっと来てほしい

考察すると、村での継続した生活を希望するが、仕事がないため、プノンペンや都市部に出稼ぎに出ているのが現状。結果として村の貧困は抜本的には解決には至らず、多くの人々が今回の道路拡張による立ち退きで借金を抱えている状況だった。また、こどもの学びたい意欲は高いが、親世代の教育が十分でないため、教育の必要性は理解しているものの、どのような教育がよいものなのかを知らない状況があった。

村の人々は村での生活を望んでおり、生活の改善（特にインフラ）は希望しているものの、都市部での生活を希望している村人は少なかった。

【高校生教育】

2017 年 3 月に中高生を対象に、それぞれが村の課題を解決していくための「マイプロジェクト」を作った。立ち上がったプロジェクトは 2 つ。1 つはこどもたちの英語教育の充実に向けたプロジェクト、もう 1 つは、村の環境の問題を解決していくプロジェクトだった。5 月以降は、その 2 つのプロジェクトを現地日本人スタッフが伴走。

英語教育については、対象の高校生が 3 年生で卒業試験が重なり、8 月まではほとんど実施できなかったが、試験終了後より日曜日に不定期であるが実施。高校生がこどもたち 15 名程度に英語を教えていた。定期的に日本人スタッフが振り返りを行い、教育の方法についてアドバイスすると共に、卒業後に英語をこどもたちにおしえていける人材を確保していく方法について検討していった。結果的には、中学生がその後を受け継ぐこととなったが、中学生の英語力の問題もあり、中高生による英語の授業は定期的なものとはならず、代表の SokPharith 氏が引き継いでいった。

環境プロジェクトについては、上記にも記載したように、中学生が中心となって月 2 回実施していった。中学生自らが様々な工夫を提案し、それを実現する方法を現地日本人スタッフと検討。日本にいる代表（原水）とも実現可能性について適宜 Skype など連携を図り、定期の実施を続けていった。

【感性教育】

村のこどもたちが絵本を常に読める体制を作るために、図書スペースを作成。絵本を寄贈して図書を増やすと共に、日本人スタッフによる定期的な「絵本が読める時間」を作った。また、9 月にメンバーが訪問した際には、絵本の読み聞かせを毎日実施。通訳を介しての実施を行うと共に、中高生が読むことができるように読み方を伝えていった。

移動図書館については、日本人スタッフと代表の SokPharith 氏で実施。開催場所を増やすと共に、月 1 回程度実施していった。

【フォローアップ】

9 月に団体代表とスタッフにより現地訪問を行った。上記の状況を把握すると共に、仕事づくりに向けたプロジェクトの方向性について話し合った。CIFT0 の借金については定期的に返済。銀行以外からの借り入れもあったが、夏・秋のスタディツアーの受け入れによって、全額返済することができた。

仕事づくりについては、スタディツアーの受け入れに向けた広報を現地日本人スタッフと、日本側

で連携して実施。ちらしとホームページを英語版・日本語版で作成し、SNSも活用しながら、広報した。結果的に今年度のスタディツアー参加者は、昨年度の2倍程度（31人：平成29年5月～平成30年1月）と増加し、収益も増加した。また、日本人現地スタッフが新しい仕事づくりを模索している際に出会った、株式会社黒川がプノンペンに出店しているコギーファクトリー代表の崎山氏と連携し、次年度の古着販売に向けた準備をスタート。同時に村で栽培されたモリングを活用した商品の開発にも着手した。

（２）実施成果：

CIFT0 の本来目指してきたフリースクールとしての充実については、収入源が増えたことで、日本語教育、英語教育ともに、代表 SokPharith 氏が毎日の授業を実施できる状況を確保。質についても「世界の人びとのための JICA 基金」を活用した教材の充実と英語・日本語教育に外国で携わった現地スタッフ（藤元氏、堤氏、久川氏）が入ることで、ノウハウを SokPharith 氏に伝達。安定的な経営とまではいかないものの、継続的にフリースクールを運営できる状況は確保。また、中高生による CIFT0 運営への積極的なかわりについては、「マイプロジェクト」を考えるプロセスをとったことで、種を植えることはできた。今後の充実が課題とされる。

一方で村のニーズ調査実施により、CIFT0 の存在意義について再確認。こどもたちの教育の場の確保と共に、村のそもそもの貧困対策についても課題が見えてきた。今後は見えてきた課題に対して、SokPharith 氏や村人が主体となって取り組めるような環境づくりをどのように創っていくかが課題とされる。

○ホームページのリニューアル

英語ページ：<http://cift0.weebly.com/>

日本語ページ：<http://cift0-japan.weebly.com/>

○SNS の充実

→CIFT0 Facebook ページの定期的な更新：<https://www.facebook.com/Cift0School/>

→CIFT0 Instagram のスタート

○プロフィールムービーの作成

→CIFT0 のムービー：<https://www.youtube.com/watch?v=9ZYJEmyZH8>

→スタディツアーのムービー：<https://www.youtube.com/watch?v=qDUuyfzzRXw&feature=youtu.be>

上記のように広報に力を入れたことで、スタディツアーへの参加者が倍増。CIFT0 の収益につながったことによって、安定的にフリースクールが運営できる体制の整備へとつながった。

（３）得られた教訓など：

首都プノンペンとベトナムをつなげる道沿いにあるこの街（コッカエル）は、国の動向に大きく左右される状況があり、道路拡張による立ち退きもその１つ。仕事は市街地（プノンペン、シェムリアップ）に集中し、貧富の差は広がるばかりの状況。そんな状況の中で村の人々の仕事は農業や小売業、請負業（道路工事）がほとんど。小売業については村の中でお金を回しており、貧困を解決するそもそもの手段にはなっておらず、農業についても安価で市街地で売るしかない状況。政治が混乱し、国の再建が必要な状況が見え隠れする中で、目の前の生活を脅かす貧困を新しい仕事づくりで解決していくと共に、長期的な展望を描く意味で、こどもたちの教育に本気で力を入れていくことが必要不可欠なことを痛感した。

そのためにも、村の人々の声に寄り添い続ける現地スタッフを常駐させ、顔の見える距離で伴走を続け、本気で仕事を創り、教育の質を村ごと見直すきっかけづくりに着手する必要性を感じている。そのため、村人を関心のある物・事をきっかけに巻き込み、協同していくことを目指す。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

１月末でもって本事業は終了となったが、CIFT0 への支援は継続。３月には再度、代表を含めメンバーで現地へ訪問。コギーファクトリーと連携した村での古着販売による CIFT0 の収入の確保を進め安定的な収入を担保し、代表 SokPharith 氏が授業に集中できる体制を創る。また、日本語教育を継続すると共に、よりニーズの高い英語教育の充実を目指す。そのために参加しているこどもたちの英語力を計ると共に、成長が追える環境を整備する。そして、外部資金を村に取り入れていくためにも、スタディツアーの広報に力を入れ、日本のみならず、外国からの参加者を増やしていくためにも、カンボジア国内の旅行会社と連携していく。また、ツアーの質の向上を目指し、３月の訪問の際には、ツアーに取り入れていけるコンテンツを試し、プランの多様化を目指す。

そして、安定的な CIFT0 の運営のためにも、学生の長期インターンシップを募集し、日本人スタッフが常駐できる体制づくりを目指していく。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

- ・「世界の人びとのための JICA 基金」の決定を SokPharith 氏に報告すると、大喜び。特にスタッフが常駐すること、教材の充実が図れることには喜んでいて。その後、最初のスタッフに初期から関わりのある藤元氏が決定すると、様々な提案を弊団体代表に提案してきた。

- ・ SokPharith 氏の生活は苦しく、借金返済に追われる日々。スタディツアーが入る季節（夏）は、安定的な収入が入るため落ち着いたが、閑散期は CIFT0 を改装し小売業をスタート。同時期に本人の出産が重なり、出費が増えた状況の中で、必死で仕事づくりやツアーの対応を行う姿が印象的だった。

- ・一時期は弊団体の支援からの収入を充てにしてしまう状況があり、SokPharith 氏の主体性が乏しい時期があったが、伴走を続け、自律して CIFT0 を経営していけるように促すことによって、授業の合間を見て、別の収入源の確保を目指す姿が見られるようになった。

- ・現在、SokPharith 氏からの提案で、来年度に向けて新クラス（日本語、英語）をスタートする予定で、日本語の教科書を寄贈するための寄付を現在弊団体で集めている。

(2) 活動の写真



(最初の現地スタッフに入った藤元氏と子どもたち)



(ゴミ拾い活動「Greenbird」の様子)



(英語の映画を見ながら、勉強する子どもたち)



(村の大人と一緒に実施するゴミ拾い)



(新しい仕事としてのお茶づくりを試行的に実施)



(寄贈した絵本と作成した絵本コーナー)



(日本文化の体験として七夕づくりを実施)



(授業の様子)



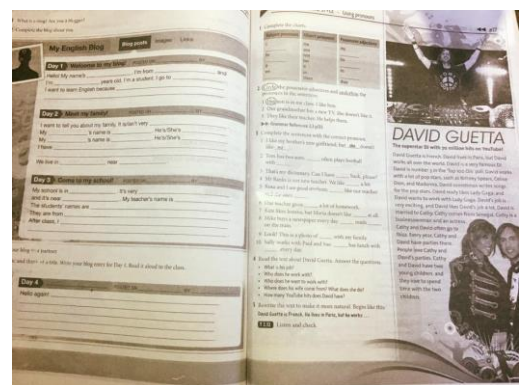
(GIFTO 前が雨季に水浸しになるため道路舗装を実施)



(Upple が寄贈した手作りのごみ箱)



(スタディツアー参加者にバナナチップづくり体験)



(寄贈した英語の教科書)



(村人へのインタビューを実施している様子①)



(村人へのインタビューを実施している様子②)



(中高生と取り組む「マイプロジェクト」の様子)



(図工の授業に取り組む子どもたち)



(石原舞氏によるトランポリンの体験)



(メンバー全員との集合写真)



(絵本の読み聞かせの様子)



(アメリカからのツアー参加者の受け入れ時の様子)



(村のこどもの笑顔①)



(村のこどもの笑顔②)